

欧亜純白

ユーラシアホワイト

I

プールサイドには、ほぼ五メートルおきにヤシの木が植えられている。高さは五、六メートルあって、張りだした葉のつけ根には、青々とした実が七、八個生なっているのが見てとれた。

ヤシの葉は海から吹きつける風に、泳ぐような動きを見せ、その下に並べられたデッキチェアに落とす濃い影を揺らしていた。

この時期、熟しきっていないヤシの実に危険はない。冗談のような話だが、落ちた実に頭を直撃され、命を落とす人間がいた時代があったのだ。

数年前、それに見せかけた殺人が起こった。死体は海浜公園のヤシの木の根もとで、早朝発見された。頭頂部が陥没しており、そばに血のついたヤシの実が転がっていた。しかし、傷の形状と、ヤシの実の形が一致しなかった。

死んでいたのは二十七歳のチャモロ族の男で、スーパーで働く女房に食わせてもらっていたごくつぶしだった。

三日後、警察は、被害者の妻の上司で、スーパーの副支配人だった白人を逮捕した。犯人は被害者の妻とできてしまい、それをネタに被害者に強請られていたのだ。犯人の車から、被害者の傷の形状

と一致するハンマーが見つかった。

マリオは、熱帯の青空に浮かぶヤシの緑色の実を眺めながらそんなことを思いだしていた。ホテルのユニフォームである水色のアロハシャツの下を汗が流れている。マリオが立っているのは、プールサイドバーの庇の下で、直射日光からは逃れているのだが、それでもひどく暑かった。

腕時計は、十二時二十分をさしていた。太陽はほぼ頭上にあつて、容赦のない光を注いでいる。プールサイドのデッキチェアはすべてが埋まり、プールからは絶え間なく水しぶきと歓声があがっていた。スラックスのベルトに留めた無線機が鳴った。マリオは無線機を口もとにもつていった。

「マリオだ」

「ジョージだ。部屋に入った。奴はそこにいるか」

「いる。女もいっしょだ」

マリオは答え、直径一五メートルの楕円形のプールをはさんで、向かい側のデッキチェアにいる三人組を見やった。

中央に東洋系の男、左右に東洋系の女がふたりだ。男はチャモロ並みの肌の色をしていて、細長くキザな形のサングラスをかけている。首の周りと手首に金の鎖を巻いていて、左肩にタトゥがあつた。かたわらのテーブルにバドワイザーの注がれたグラスがある。左右の女たちは、まるで双子のようだった。どちらもほつそりとしていて色が白く、髪が長い。生きていくのに必要な内臓が本当にそこにすべておさまっているのだらうかと思えるほど細くくびれた腰をしているのに、小さなビキニのトップを押しあげている胸は信じられないほど大きい。

声は聞こえなくとも、女たちがじゃれあつていることはわかつた。寝そべつて動かない男をはさみ、日焼け止めクリームチューブを手にした片方の女が、もう片方の女の背中に手を這わせている。そ

の手の動きは、ひどく淫靡で、セックスを意識したものだつた。背中を触られた女が身をよじり、大きく口を開けて何ごとかをいった。女たちもサングラスをかけている。レイバンの普及タイプだ。よく似合っている、とマリオは思った。同時にその三人は、周囲のデッキチェアに寝そべる観光客とはあきらかに雰囲気異なつていた。

三月のこの時期、グアム島を訪れる観光客は、家族連れが多い。日本人、中国人、韓国人、親子二代から三代に至る組み合わせがほぼ半数を占める。その他は、男どうしや女どうしのグループで、カップルは意外に少ない。カップルが増えるのは、五月の雨期に入つてからだ。

その三人の雰囲気が周囲と異なつて見えるのはしかし、家族連れではないからではなかつた。

こいつらは昼の世界の住人じゃない——マリオの勘がそう告げているのだ。

祝福された結婚をし、子供をもうけ、太陽の下で額に汗して稼いだ金を使って、グアムに楽しみを求めてやってくる——そんな観光客たちとはほど遠い世界で生きている。今日のこの時間太陽の下にいるが、普段暮らしている住処のある街では、同じ時刻とどうい彼らがベッドの外にいるとは思えない。

女たちの不健康なほど白い肌と、人工的に焼いたとしか思えない、不健康なほど黒い男の肌がそれを物語っていた。

こいつらが、トウキョウか、ホンコンかタイワンかソウルか、どこからやってきた連中かは知らないが、まちがひなく夜の世界の住人なのだ。

熱帯の青空と焼けつくような陽射しには最も縁遠い日常を送っているにちがいない。

マリオは無線機を口に近づけた。

「見つけたか」

「いや、ざっと調べた限りでは、ない。デポジットボックスかもしれない」

ジョージが答えた。

「開けられないのか」

「マスターキーはあるが、使うと奴らが記憶させたナンバーが消えてしまう。マズいだろうか？」

「マズいな。それだと気づかれる」

「どうする。夜まで待つか」

「その方がいい」

「テン・フォー。部屋をでる」

ジョージが交信を切ると、マリオは無線機をベルトに戻した。

ホテルのユニフォームを着た人間が無線機を使っている姿は、決して人目を惹かない。

広大な敷地をもつリゾートホテルでは、屋内屋外、どこにいてもゲストの安全と快適な滞在に対応できるよう、幹部級の従業員には無線機がもたされる。従業員たちはそれによって、次々と空港からバスで送り届けられる団体客を混乱なく捌き、部屋に案内し、荷物や食事の世話をする。

揃いのアロハを着け、無線機を腰にさした姿は、ヤシの木と同じように、どのホテルでも見かけられることができる。

ただし、マリオとジョージが今交した交信の無線周波数は、ホテルサービス用ものではない。

グアム警察無線用の周波数だった。

面積五四一平方キロのグアム島は、日本の淡路島とほぼ同じ大きさがあつて、マリアナ諸島の最南端に位置し、アメリカ合衆国の自治属領である。人口の半数強がチャモロ系で、それに次いで北アメリカ系、フィリピン系が占めている。グアム島にあるアンダーソン空軍基地は、アメリカの太平洋制

空権を担う最重要拠点とされている。島民はアメリカの市民権をもちながらも、大統領選挙には投票できないという奇妙な立場だ。

一九四一年、日本軍はこの島を占領したが、その三年後にはアメリカ軍の攻撃にあつて玉砕した。

東京の南、二五〇〇キロという地点は、ジェット旅客機でほぼ三時間強、ハワイのホノルルよりも五〇〇キロ以上、飛行時間にして四時間、日本に近い距離にある。観光施設は、島の中央北部のタモン湾沿いに集中し、その大半が日本資本によるものだ。しかし近年、日本よりさらに西に位置する香港や韓国、台湾からの観光客が急増している。それらの観光客にとつても、ハワイより飛行時間が短くてすむのが大きな魅力となっているのだ。

かつては英語の他は日本語が幅をきかせていた、レストランや土産物屋の看板に、最近ではハンゲルや中国語が加わり、リゾートホテルのフロントには、韓国語を話すクラークが立つようになった。

韓国資本のホテルはまだ少数だが、島内を走る乗用車は、日本車に匹敵する勢いでヒュンダイなどの韓国車が増えつつある。

グアムは、アジアに最も近い「アメリカ」なのだ。

「奴がでてきた」

ジョージの声に、うとうとしかけていたマリオは身を起こした。ホテルのロータリーの端に止めたタクシートの運転席に彼はいた。腕時計をのぞき、開けていた窓を閉める。時刻は午後十一時だった。

「ひとりか」

無線機に声を送りこんだ。

「ひとりだ。さつきまでは派手にお楽しみだったがな。どっちは知らないが、ライオン並みの声を

だす女がいる。日本人の女つてのは、もつと恥ずかしがり屋だと思っていたがな」

「奴は日本人じゃない。中国人だ」

「本当か。どうも見分けがつかないな。名前もややこしいし」

「フロントに届いている奴の名はチンだ。Nで終わるファミリーネームは、中国人が多い」
「どっちでもいい。今、フロントの前を通った。もうすぐそっちへいくぞ」

ジョージは、フロントの裏側にあるオフィスから連絡をよこしていた。昨年完成したばかりのこのホテルは最新のセキュリティシステムを誇っていて、各階のエレベーターホールには監視カメラを備えている。警察OBの保安責任者は、ジョージとマリオの頼みをうけ、その映像を容疑者の監視に使うことを了承したのだった。

ただしホテル内での逮捕はしない、という約束で。

「荷物は？」

マリオは訊ねた。

「もってるぞ。ショルダーバッグだ」

そのとき、タイヤを鳴らしながら、赤いスポーツタイプの車がホテルのロータリーにすべりこんだ。窓にまっ黒なシールドを施していて、車内のようすはうかがえない。

赤いスポーツカーは、まるでタイミングをはかっていたかのように、ロータリーに現われたチンのかたわらで止まった。

お迎えとほたいしたものだな。リコ兄弟は、あんたのことを大切にしているわけだ。

マリオは胸のうちでつぶやいた。

チンは白い麻のシャツに、はき古したジーンズ、裸足にローファーというスタイルだった。肩から、

布でできた円筒形のショルダーバッグをさげている。

めいっばい詰めこんで五キロ。だが吊りヒモの張り具合から推理して、そんなには入っていない。

二、三キロといったところだろう——マリオはそう判断した。

チンはわずかにあたりを見回すと、素早くスポーツカーの助手席に乗りこんだ。サンダグラスに隠されていらないその目を、マリオはハンドルに顔を伏せるふりをしながら、はつきり見てとった。

ずる賢く、用心深い目だ。人にいえない商売を長年やってきた者特有の、落ちつきのなさがある。

スポーツカーは、タモン湾沿いを走るマリンドライブを左折して東に向かった。マリオは借り物のタクシーをスタートさせた。

「尾行を開始する」

無線機に告げる。

「テン・フォー」

スポーツカーの運転手は、人目を惹かない運転を心得ていた。スピードをだしすぎることなく、高級ホテルやショッピングセンターの建ち並んだ通りを走っていく。

八〇〇メートルほど進んで、右折のウインカーをきらめかせ、北マリンドライブに合流した。

どうやら平行する道を元きた方角に戻ろうとしているようだ。尾行の有無を確認するつもりにちがいない。

その手には乗らない。マリオはメーターを倒し、点いていた空車ランプを消した。お前のいく先もわかっている。

北マリンドライブを南に向かったスポーツカーは、パシフィックスターホテルの向かいで再びマリンドライブに合流した。そのまま西へ向かう。

次は大司教像のロータリーを使う気だ。直感したマリオはタクシーのスピードをあげ、スポーツカーを追いこした。

信号を左折して、イパオロードに入り、アガニヤに向かう。ロータリーを回ったスポーツカーは、ホスピタルロードを南に向かう筈だ。リコ兄弟の経営する「ハフアダイステーキハウス」は、アガニヤの目抜き通りにある。先回りして、シヨッピングセンターの店先で待ちかまえばわけはない。ジョージもまっすぐそこへ向かっている筈だ。

無線機が鳴った。

「今、どこだ」

「イパオロードを南に向かっている。奴は赤いスポーツカーにピックアップされた。ホスピタルロードにいる筈だ」

「それなら今俺の目の前にいる車だ」

マリオはにやりと笑った。ビンゴだ。

「リコ兄弟の店は裏口がある。そこへ直接つけるつもりだろう」

「テン・フォー。先回りしてくれ」

リコ兄弟は、日本人相手のポルノショップで稼いで、四年前に今のステーキハウスをこしらえた。弟のサンチェは、日本語と中国語を喋ることができ、兄のアントニオは腕っぷしが強い。

ステーキハウスのオーナーとなって陽の当たる稼業を手に入れても、兄弟はうしろ暗い商売を畳むつもりはなかった。それどころか、もっとうしろ暗い商売——ドラッグビジネスに手をだしたのだ。

台湾産のドラッグがリコ兄弟を経て、島内で捌かれ、そのうちの一部が本土に流れこんでいるらしいという情報をもたらしたのは、アンダーソン基地の犯罪捜査局（CID）だった。基地内で兵隊が

使用していたドラッグの入手先を追及したところ、リコ兄弟の名があがったのだ。CIDはグアム警察に協力を依頼し、マリオとジョージが運び屋をつきとめる捜査にかかった。

マリオはフィリピン系で、ホテルマンに化けても怪しまれない外見をしていたし、空軍を除隊して警官になったジョージは、兵隊相手の訊きこみに強い。

六カ月を経て、ふたりは、観光客を装った運び屋をつきとめた。運び屋は東洋系で、女連れを装い、必ず団体客に混じってグアムに上陸する。その方がバレにくいからだ。

運び屋は慎重で、この六カ月に三度グアムを訪れているが、パスポートの名義は毎回ちがうものを使っている。しかし今回は、グアムに到着した直後から、マリオとジョージの監視をうけていた。

リコ兄弟が運び屋からドラッグを受けとる現場に、ふたりは踏みこむつもりだった。

たとえミクロネシア一の弁護士を味方につけても、十年は刑務所をでられないようにしてやる。今夜がその絶好の機会だ。

マリオはタクシーを、ハングルの看板が掲げられた土産物屋の前に乗りあげて止めた。いささか怪しい土産物を扱うこの店は、午前一時まで開いている。

斜め向かいの航空会社のオフィスの隣りが、「ハフアダイステーキハウス」だった。とうにネオン看板の明かりは消え、駐車場に車は一台もない。

だが裏手にも、二台ぶんの駐車スペースがあることをマリオは知っていた。表から見ればステーキハウスは閉店し、中は無人のようだが、裏に面したオフィスにはリコ兄弟がいる筈だ。

マリオがタクシーを降りると、土産物屋から揃いのポロシャツを着た東洋人の若いカップルができて声をかけた。

「タクシー？」

車を指さし、乗せろという身ぶりをする。

「ノー」

マリオはいって、首をふった。男が何ごとかをさらにいいかけたが、耳を貸さず、通りを渡った。航空会社のオフィスの入口付近の暗がりには隠れ、無線機をとりだした。

「表に着いたぞ」

「奴らは今、車から降りたところだ。応援を呼ぶ」

「テン・フォー」

リコ兄弟が抵抗をするとは、マリオもジョージも考えてはいなかった。この小さな島では、たとえその場を逃げお世話としても、隠れる場所などどこにもない。空港と港を固めてさえしまえば、犯罪者は袋のネズミだ。

それでも用心のため、ジョージはパトカーを呼ぶといった。リコ兄弟はともかく、運び屋のチンが暴れるかもしれないというのだ。

ものの三分もしないうちに、回転灯を消したパトカーが二台、「ハファダイステーキハウス」の正面に静かに横づけになった。中から四名の屈強なチャモロ系警察官が降りてくる。

マリオはふたりを、裏を固めているジョージに合流させ、「ハファダイステーキハウス」の正面玄関の前に立った。

「はさみ撃ちでいくぞ。まずこつちが先に入る」

無線機にそう告げ、内側のシェードが降りたガラス扉をノックした。一応の用心のため、拳銃を右手にもつ。

返事はなかった。もう一度ノックしながら、マリオはあたりを見渡した。午前零時を過ぎ、さすが

にアガニヤ地区も車や人の数が減っている。さつきマリオの車に乗ろうとした東洋人のカップルの姿も消えていた。

「――誰だ」

扉の内側から声がかえってきた。

「警察だ。ここを開けろ」

マリオはいった。シェードがさっと開き、驚きの表情を凍りつかせたアントニオの顔がガラス扉の向こうに浮かんた。マリオはバッジをガラスに押しつけた。

アントニオの姿がシェードの陰に隠れた。扉が開かれるようすはない。マリオは拳でガラスを叩いた。

「開けろ！」

わめき声が店の中から聞こえた。英語ではなかった。

マリオは一步退き、片足をひいた。こうなったら蹴破るまでだ。

そのとき爆発が起こった。閃光とともに「ハファダイステーキハウス」が内側から巨大な力でふくれあがったようにマリオには思えた。まっ赤な炎が窓ガラスをつき破って噴きだし、幾千幾万ものきらきら輝く破片とともにマリオの体は一〇メートル近くも吹き飛ばされた。

音の衝撃がやってきたのは、マリオの体が地面に叩きつけられる前だった。マリオのかたわらに立っていた二名の警官は炎に呑みこまれ、空中を飛んでいるときにはすでに絶命していた。

二台のパトカーは爆風のおおりで、まるでマッチ箱のようにひっくり返った。あたりの建物のガラスは砕け散り、轟音は五〇〇メートル離れた地点に立っていた者の体すらもちあげるほどの大きさだった。

ジョージを含む、五名のグアム警察所属の警察官は即死した。「ハファダイステーキハウス」は原型を留めないほど破壊された。内部に何名の人間がいたのかは、その後軍の専門家が調べても判断で

きなかった。

ただ確かなのは、この爆発によって、台湾とグアムを結ぶ、ドラッグの密輸ルートが失われたという事実だった。リコ兄弟と、チンという名で観光客に混じってグアムに上陸していた運び屋はこれによって死亡した。

問題は、誰が何のためにこのような爆発を引き起こしたかだ。

爆発は事故ではなく、故意に引き起こされたものであることがすぐにあきらかになった。すなわち、誰かが爆発物をしかけたのだ。

その人間の狙いがリコ兄弟であったと、グアム警察もすぐにつきとめた。奇跡的に命をとりとめたマリオは、自分たちの捜査がリコ兄弟に知られていた可能性は一パーセントもなかったと証言した。

だがそのマリオですら、誰が何のためにリコ兄弟を爆殺したのか、論理的に説明することはできなかった。政治的テロの対象と考えるには、リコ兄弟はあまりに犯罪にかかわりすぎている。

その後三カ月ものあいだ、病院のベッドに縛りつけられ、マリオは爆発の意味を考えつづけることになった。本土に比べればはるかに平和な土地柄とはいえ、三年間の制服勤務を含む、十年の警官生活で身につけたマリオの勘は、それをこうとらえていた。

爆発は、何かの終わりを意味するものではない。何かの始まりを告げているのだ、と。

2

見渡す限りの牧草地帯だった。毛並みのいい黒々とした雌牛が草を喰み、粗末なブリキのバケツを

手にした老婆がその乳をしぼっている。木造の、お世辞にも立派とはいえない建物がぼつんと存在していて、その中庭では放し飼いにされた雌鳥が産み落とした卵を男が拾い集めていた。

実のんびりした光景だ、とベリコフは思った。双眼鏡のレンズの中でとらえた卵は、殻の色が濃くて、大きな黄身が詰まっていそうだ。

建物のかたわらに、木の柵で囲まれた干草の山があった。巨大なフォークを手にした男がふたり、その干草の山を崩して手押し車の上に乗せている。

一キロほど離れた場所を古ぼけたトラクターがのろのろと走っていた。その形は、一九五〇年代に作られたテレビドラマに登場したトラクターを思わせる。

あの番組は何とあったっけ。確か馬が喋る、とかいう内容のホームコメディだった。古きよきアメリカ。ベリコフの父親もまさにそれを夢見て、アメリカに渡ってきたのだ。

引退したらこんな農場生活も悪くはない。ただしこは、アメリカに比べて寒すぎる。それに平和ともいえない。このどかさば、すべて作り物だ。干草や牛の乳は、近くに住む農民たちが目と耳で塞いでいることへの報酬だし、口を閉じさせるためにはより効果的な道具を農場の連中は使う。卵を集めている男が肩にかけたカラシニコフだ。

干草を載せている男たちの腰にもマカロフがはさまれている。

「パラツオは、十日前にあの農場にいた」

運転席にすわるクリチェンコがいった。まだ四十をいくつかでたばかりで、ベリコフと、さほどかわらないというのに、腹まわりにはでっぷりと肉がついている。その理由をベリコフは、モスクワに着いた晩に早速知った。ウオツカだ。それも半端な量ではない。ベリコフは子供の頃、父親から、祖父がいかに大酒呑みだったかという話を聞かされていたが、*「伝説」*のようなものだところまで思っ

ていた。しかしどうやらそうではなかったらしいと、三十年たつて思い直すことになった。

「そのあとどこへ？」

ベリコフの問いにクリチェンコは肩をすくめた。

「さあ……。イタリーか」

「イタリアには帰れないんだ。シチリアのデレーナ一家との抗争に決着がついていない。ローマに降りたつたら最後、奴は必ず消される」

「だったらドイツかオランダかもしれない。ヴィクトウルの一家は、キルギスからのヘロインをボンやアムステルダムに流している。道はいくらでもつけられる。金が流れる道は、すべてを通す。金の流れだけは食い止めることはできない。金はブルドーザみたいなものさ。でかい金が流れれば、地均しが終わる。邪魔者はすべて消されて、あとからやってくる組織に障害物は何もなし、というわけだ」

「それはどこの国でも同じだろう」

「いや、ちがう。モスクワだけでヴィクトウルの一家みたいな組織が何十とあるんだ。仲間を集めて名乗りをあげさえすりゃ、誰でも一家の親分になれる。ただし、お偉いさんとのコネがなけりゃ、武器をかき集めなけりゃならんだろうな。この国で、一番まともに機能するシステムをもっているのがマフィアの連中だ。ケチなチンピラが、レストランや企業を強請りにいく。端金が目当てだ。そういったのを叩きだす警備会社を、もう少し頭のいいチンピラが始める。」

もっと頭のいい奴らは会社をこしらえる。何の会社かって。流通だ。ロシアは広い。この広い国の中を、物をあつちからこつちへ動かすには、いろんな力がある。車を集める。その車を動かすガソリンを手に入れる。運転手も必要だ。さらに積荷をあげおろすためのリフト、人足、しかも運搬中、追

剥ぎにやられないようにルート各地のボスに根回しをしなければならぬ。そんなことができるのは、お偉いさんとかつついたマフィアだけだ。

積み荷が合法品だろうが非合法品だろうが関係ない。ベリコフ、この国でビジネスマンという言葉は、マフィアと同義語なんだ。そうじゃないまっとうなビジネスマンもいるが、そういう連中は、儲けの半分を、自分と自分の会社を守るために使っている。今じゃ元KGBの破壊工作員やスペツナズにいた連中はひっぱりだこだ。企業の保安担当重役として、とてつもない給料がもらえるからな。俺だって——」

いって、クリチェンコは顔をそむけ、息を吐いた。

「そういう話があったら考えちまうだろう。もうあと二年、組織犯罪対策班でキャリアを積めば、企業から声がかけられる。アメリカや日本、韓国なんかの企業さ。そうなれば、こんなオンボロの車に乗って、真夜中に頭をぶち抜かれた死体や顔じゅうを刻まれて狂ったように泣きわめいている売人の相手をしてほしいですむようになる。子供をそういう企業の本社がある国の学校に留学させられるかもしれない」

「ロシア人てのは、もっと愛国心があるかと思ってたよ」

ベリコフは煙草に火をつけ、吐きだした。生まれて初めて訪ねた父親の国は、ベリコフの目に絶望ばかりを見せつける。

「好きさ。この国の大地はな。母なるロシアって奴だ。だが親父は大嫌いだね。この国はいつだって、女房に見合う亭主を見つけた試しがない。いつかはよくなる——俺の爺さんも、俺の父親も、俺自身も、そう思ってきた。だがそのいつかは今じゃない。今は、何といたつつけ、混沌さ。金とコネが幅をきかせ、そいつをつないでいるのが暴力だ。アメリカはもっと昔からそんな国だったと、俺た

ちは子供の頃、聞かされた。クレムリンがひっくり返る前の話だ。今はこの国の方がよほどひどいだろう。だけど、それは、子供が大人になるとき、親に逆らったり、悪さをしたりすると同じなんだ。その一時期さえ、我慢すればいい。それさえ過ぎれば、ロシアも大人になる。ただそれまでの間が、混沌なんだ」

「混沌はいつだって、犯罪者に金を稼がせる。混沌が生じれば、何が犯罪で、何が犯罪じゃないのか、はつきりとわからなくなる。うまく立ち回った奴は金を稼ぎ、乗り遅れた奴は、家族に食わせるパンを手に入れ損なう。」

だがそれはいいわけなんだ、クリチェンコ。最悪の犯罪のスタート地点は、いつだって最貧の土地なんだ。連中は皆、生まれ育った土地のせいにする」

ベリコフはいった。クリチェンコはベリコフを見た。

「あんたはどこで生まれたんだ」

「ブルックリン。ニューヨークの南で、黒人とロシア人の街だ」

「聞いたことがある」

クリチェンコはつぶやいた。そして、不意に身を起こした。

「奴らがきやがった」

牧草地帯をまっすぐに抜ける道を三台の車が土煙をあげて近づいていた。先頭はBMW、うしろ二台がメルセデスだ。

クリチェンコはダッシュボードの下にある無線機のマイクをつかんだ。

「奴らを農場の中に入れる。逃げ道を塞ぐんだ。逆らう奴はかまわんから撃て。油断するな。連中は、保安部隊をひとり片づけることに銃の握りに刻みをひとつ入れてるって噂だ」

ふたりの乗った車は、農場を見おろす高台に建てられた粗末な農具小屋の中にあつた。

「さて、何がでてるかだ」

クリチェンコは革ジャケットの下に吊るしたホルスターからマカロフを抜いて弾倉を点検し、いった。

「容疑は恐喝だろう」

「そうさ。だが、キルギスからもちこんだヘロインをヴィクトウルはあそこに隠していると俺はらんでるんだ。そいつがでてくれば、あんたもはるばるアメリカからやってきて無駄足を踏まずにすむというわけだ、ちがうか」

くたびれた小熊のようだったクリチェンコは一転して、^{ぞんも}擻猛な刑事の顔になった。

「ヴィクトウルをパクったら、あんたに奴を取調べる時間をやるぜ。テレビや映画で観ると、アメリカじゃ弁護士がうるさいらしいが、こつちじゃまだ俺たちの方が強い」

「どういふことだ」

「奴らは大物にコネがある。そのせいでパクられたあと、奴らの運命は二種類しかない。あつという間に無罪放免となるか、あとあと大物から『私の友人に何てことをしてくれたんだ』と文句がつかないよう、頭をぶち抜かれちまうか」

クリチェンコはにやつと笑った。

「権利はどうなるんだ、容疑者の——」

「権利だ。じゃ俺たちの権利はどこだ。薄ぎたないアパートに住んで、毎日同じ物を食い、安い、それも始終遅れる給料で、市民のために命を張ってる俺たちの権利は?! 奴らは外車に乗って、豪勢な家に住み、毎日うまい飯と酒をたらふく食らっているんだ。引き換えさ、今までさんざんしたい

思いと引き換えに、刑事に逆らったら、鼻を折られ、膝を割られて、それでも足りなげりや頭をぶち抜かれる。そういう、奴らの惨めな姿を、俺はテレビで流してやりたいと思ってる。鼻水と涙をたれ流して、ひざまずいて命乞いをするマフィアの姿をな。そうすりゃ少しは、マフィアに憧れる馬鹿なチンピラも減るだろうさ！」

クリチェンコの語気は激しかった。ベリコフは息を吐いた。ロシアは想像していた姿とあまりにもちがっていた。刑事と犯罪者の関係は、まるでアメリカとかわからない。ただしアメリカの犯罪者たちはもともと洗練され、上辺をとりつくるっている。

ロシアからの亡命者の子として、ブルックリンで生まれたベリコフは、生きのびるのに必要な知恵の大半を十二歳までに街で身につけた。高校を卒業して陸軍に入り、二十四歳で除隊した。奨学金をもらって大学にいき、卒業後DEA（連邦司法省麻薬取締局）に入ったのだった。

DEAの取締官として十年のキャリアを積んでいた。その間の大半を、ベリコフはマイアミとメキシコシティで過ごした。メキシコ国内では年に五〇トン前後、ヘロインの原料となる阿片が作られている。その阿片はヘロインに精製され、コロンビアからきたコカインとともに、マイアミに上陸する。

メキシコで二年間、ベリコフは潜入捜査官として働いた。ヘロインの密輸スケジュールをつかみ、DEAに流す仕事だ。

ベリコフの仕事は効果をあげていたといえるだろう。三人のパイロットを含む、四つの密輸グループをベリコフは、商売のできない状態に追いこんだ。だが一昨年、メキシコシティの麻薬組織とコロンビアのカリカルテルの連中がひょんなことからつながりを持ち、それぞれの稼業の邪魔をしていると覚しい、警官や取締官の情報交換をおこなった。

それでベリコフのカバー（偽装）がはがれた。かすかなひとつの疑いがふたつに増えれば、それは死刑宣告と同じだ。麻薬組織の計算方法は、常に引き算だ。一引く一を零にして、ベリコフが取締官かどうかを確かめようとする。それはすなわち、「とりあえず奴を消してようすを見る」という発想だ。いつか必ずその日がくることを予期していたベリコフは、組織の中に小鳥を飼っていた。小鳥は、ベリコフの抹殺指令が下ったことを、二年間の月々千ドルの小遣いと引き換えに知らせた。マイアミにもアパートがあり、そこには気に入った家具などもおいてあったが、それすらもあきらめた。DEAは、これまでのベリコフの働きに満足していた。といって優秀な捜査官を、抹殺指令がでてくるからといってデスクワークに縛りつけるほど生ぬるい組織でもない。

メキシコで焼いた肌がすっかり白くなり、簡単な整形手術をうけて、ベリコフはニューヨーク支局へと配属された。古巣へと舞い戻ったのだ。ニューヨークではコロンビア系の組織との接触を避け、シチリア系の組織を監視する仕事について。

かつてに比べ、シチリアマフィアはすっかり麻薬ビジネスから手をひいているかのように思われているが、金を洗濯する作業においては、最も古くから経験を積んでいる。犯罪でかき集められた金は、ラスベガスやアトランティックシティのホテル建設費用に化け、さらに上場企業の株やハリウッドの映画製作に投資されるのだ。

ベリコフは、ニューヨークでは二番手のファミリーに所属する弁護士に目をつけた。弁護士といっても、刑事裁判ではなく、企業の買収や合併の専門家だ。それがパラッツォだった。

初めてパラッツォを見たとき、ベリコフは懐かしい匂いを嗅ぎとった。ブルックリンはブライトンビーチ、今や全米最大のロシア人街で、かつて、この男を見かけたような気がしたのだ。

ベリコフの勘は当たった。パラッツォの本名は、ユージン・キリノフといって、ロシアからの移民の怪だった。

キリノフは、ベリコフと同じくブルックリンで生きのびる術を身につけたあと、さらにニューヨーク大で経済と法律を学び、シチリアマフィアが経営する法律事務所に就職したのだった。

パラッツォは、ファミリーの首領の用心棒を若い頃からつとめた幹部の名だった。キリノフは、幹部の娘と結婚し、「婿入り」したのだ。

ファミリー内における二代目パラッツォの仕事は、縄張り内であるコカインの収益金の洗浄だった。

潜入して調べを進めるうちにベリコフは、パラッツォをマークしているもうひとつの連邦機関と鉢合わせをした。財務省のシークレットサービスだった。シークレットサービスの仕事は要人警護ばかりだと思われているが、実はその最重要任務は、偽札の取締りである。

ロシア製の偽ドルが、ブライトンビーチを出発点に全米に流れている——シークレットサービスの担当官は、パラッツォをマークしている理由を、そうベリコフに告げた。

そうした矢先、パラッツォがモスクワへ飛んだ。シークレットサービスのマークを嗅ぎつけたとは思えなかった。パラッツォも小鳥をワシントンのどこかに飼っていたのだ。

DEAは、ベリコフが母なる大地、父親の国へ行くことを許可した。ちょうど、パラッツォの事務所とつながりのあるコロンビア組織が、ベリコフの正体に疑いを持ち始めているという情報が電話の盗聴でもたらされたのだった。

アメリカ国内における連邦機関職員の殉職数の多さでDEAはまちがいにたくトップクラスに立つ。金と時間、人員を投資して築きあげた、密輸・販売ルートを、たったひとりかふたりの役人を消すこ

とで守れると考えれば、麻薬組織は容赦しない。

その他には、ちよつとした訊きこみ先で中毒者に撃たれたり、超低空飛行のメキシコからの密輸機を追っての事故等、DEAの職員はいたるところで命を落としている。

したがってベリコフのロシア出張は、本人にとっては一種の「緊急避難」ともいえる筈だった。

ところが、ICPO（国際刑事警察機構）を通じて、パラッツォの追跡を依頼していたモスクワ中央警察本部は、ベリコフを組織犯罪対策班のクリチェンコ警部に引き合わせたのだ。それはつまり、パラッツォのロシア訪問が母なる大地を訪れる観光旅行ではなかったということだった。

クリチェンコは、アメリカ生まれのロシア人の体がどれだけロシア産のウオツカに耐えられるかを試す一夜のあと、モスクワ郊外の田園地帯へのドライブへとベリコフを連れだした。

マフィアの多くは、都市部のアジトとは別に、こうした「農場」をもっている、とクリチェンコは説明した。

この農場は、マフィアにとって隠れ家でもあり、誘拐した対立組織の人間の処刑場でもある。ロシアマフィアのあいだでは、トラブルの処理方法として最も多く使われるのが、誘拐という手段なのだ。

用心棒代をだし渋ったり、「業務提携」を拒んだ企業のオーナーを誘拐し、人里離れた農場に監視つきで閉じこめておく。残された家族や企業と話がつけば解放されるが、つかないときは牧草の肥料とされるわけだ。

クリチェンコは、十日前、内偵中のヴィクトウル一家の農場で見慣れない外国人を目撃していた。外国人は、誘拐されたのではなく客としてもなされているようだった。

案内には、ボスのヴィクトウルが自ら立っていた。ヴィクトウルは英語が話せない。にもかかわら

ず、外国人と和やかに談笑する姿をクリチェンコは見ていた。外国人がロシア語を話すという証拠だった。

ICPOから送られてきたパラッツォの写真が、クリチェンコの見た外国人と一致した。だが問題は、パラッツォはすでにモスクワを離れているという点だった。その後の足取りはまったくつかめない。クレムリンが機能していた時代なら、ロシア国内で外国人がその足跡を消すなどいうことは不可能だったろう。KGBがびつたりとマークをしたからだ。

今はちがう。優秀なKGBは、企業の重役になるか、マフィアの幹部となっている。もっともそのふたつは同じ仕事だという説もあるが。

そこでクリチェンコは、彼のウオツカテストに合格したロシア系アメリカ人のために、ヴィクトウル一家の手入れに踏みきつたのだ。情報屋を威おどし、検察局長を説き伏せて強制捜査の許可をとった。

強制捜査には、KGBから仕事を受け継いだ（しかしKGBほど組織も装備も豊かではない）保安省の武装部隊が同行する。

今、その武装部隊が乗りこんだ古ぼけたバスが、牧草地帯の丘の向こうにようやく現われたところだった。

見渡す限りの緑の野と、二十年も前に造られたと覚しいバスは、よく調和していた。つい数分前と同じ坂を駆け下っていった最新型のメルセデスやBMWよりはるかに似合う。

三台の外車が農場の敷地に入ったあと、あたりは再び、のどかな静けさの中に包まれていた。

「いぐぞ」

クリチェンコはマイクにそう告げて、車のエンジンをかけ、乱暴にギアを入れた。唸り声の大きさに割に馬力のないロシア製の覆面パトカーはのろのろと、農具小屋を抜けだした。

「今日の手入れのことは、さすがに奴らの情報屋もつかんじやない筈だ。ヴィクトウルがびつくりする面をおかんでやる」

クリチェンコは嬉しそうに笑った。パトカーはトラクターの轍わだちを乗り越え、大きく弾んだ。草の切れ端や泥が瞬またたきにフロントガラスをおおう。

ふたりの乗った車が到着する前に、バスは農場の入口に達していた。迷彩服を着け、アサルトライフルを手にした兵士たちがばらばらと降り、瞬またたく間に整列して銃口を農場の正面に向けた。

別の一隊が散開して、農場の反対側へと移動している。ベリコフはそれを見て緊張した。農場にいる連中からは、その気になればいくらでも兵士たちを狙撃できる。見たところ兵士たちは防弾チョッキは着けているが、それ以外、遮蔽物は何もない場所を移動していた。

訓練はうけているが、それはあくまで歩兵部隊のそれであって、装甲車や戦車などの重火器の援護を得ているような陣形をとっている。狙撃されればひとたまりもない。

「危ないぞ。連中が撃ってきたらどうするんだ?！」

ベリコフは声を荒らげた。クリチェンコが首をふる。

「大丈夫、大丈夫。奴らは撃っちゃこない。自分らが重大な罪で告発されないことはわかっているんだ。そうなら必ず、前もって情報が入るからな。下手に抵抗してぶち殺されるほど、ヴィクトウルは馬鹿じやない」

その言葉を裏付けるように、農場の方角からは一発の銃声も聞こえなかった。それでもベリコフは半信半疑で農場を凝視していた。

カラスニコフを携えていた見張りの男も含め、目に見える範囲から、農場の住人と覚しい人間の姿は消えていた。

二階屋の木造の建物の中に、すべて身を潜めている。

クリチェンコのパトカーはようやく、丘を下る道へと合流し、農場の入口に辿りついた。バスのうしろには、あと二台のパトカーが止まっていた。

ロシア保安省の迷彩服を着けた兵士に比べ、ひと目で刑事とわかる革のジャケットにジーンズをはいた若い男が、ハンドスピーカをクリチェンコにさしだした。

「ヴィクトウルは中にいるな」

クリチェンコの言葉に、男は頷いた。

「奴らわざわざ、ペトロフカ通りを使いやがったんです。乗っているところをしつかり見ました」

ペトロフカ通りが、モスクワ市警察刑事部のある道の名だということはベリコフも知っていた。

クリチェンコは男に頷き返し、ハンドスピーカを受けとった。

「ヴィクトウル、私は組織犯罪対策班のミハイル・クリチェンコ警部だ。モスクワ市警察は、これからこの農場に対する強制捜査を執行する。抵抗する者は、ロシア保安省の武装部隊によって排除される。ただちに全員が武器をおき、両手を頭において建物の外にでてこい。でてこない者は、すべて抵抗の意志があると判断される」

クリチェンコはスピーカをおろし、農場を細めた目で見つめた。ベリコフは、防弾チョッキも着けず身をさらしているクリチェンコの度胸に半ばあきれ、半ば感心しながら、パトカーを盾にする位置に立つて見守った。

ロシア製の車は鉄板が薄く、カラシニコフの弾ならボール紙のように射抜いてしまいそうだった。

せめてエンジン部分の反対側に立つて、少しでも安全を確保するしかない。もしコロンビアで警察部隊が同じ捜査方法をとれば、ここにいる警察官全員が生きては帰れないだろう。まずパトカーやバス

にバズーカ砲が撃ちこまれ、軽機関銃の掃射が始まる。

二分で全滅だ。

「何の容疑で捜査するんだ」

そのとき、男の叫び声が農場からかえってきた。

「お前のようなボロトボロトに用はない。ヴィクトウルをだせ！」

クリチェンコは怒鳴り返した。

しばらく沈黙がつづいた。クリチェンコは武装部隊の指揮官に合図を送った。

兵士たちが一斉に膝をついて、銃をかまえた。

そのとき農場の家の扉が開いた。

スーツの上に黒革のコートを着た男が進みでるのをベリコフは見つめた。長身で、どこか貴族的な面長の顔をしている。

「ヴィクトウルだ」

クリチェンコがつぶやいた。

ヴィクトウルは落ちつき払っていた。クリチェンコがいうように、自分が重大な罪で告発されるのではないことをわかっているようだ。

ヴィクトウルはまっすぐに農場の庭をよこぎり、入口へと歩み寄ってきた。粗末な木の柵をはさんでクリチェンコと向かいあった。

「よお、ヴィクトウル。久しぶりだな」

クリチェンコはいった。ヴィクトウルは瞬きもせずクリチェンコを見つめ返し、いった。

「でてきた。連れていけ」

「そうはいかん。これからお前の農場を捜索する」
「何の容疑で」

ヴィクトウルの目が一瞬自分に向けられるのをベリコフは見てとった。
「ヴァストーク銀行のメルニク取締役を恐喝した容疑だ。お前はヴァストーク銀行が、お前の経営する警備会社を使わないのなら、メルニクを痛めつけると威したそうじゃないか」
ヴィクトウルは小さく首をふった。いかにも馬鹿ばかしいという表情だ。

「まったく知らんな。だがたとえそうだとしてもここを捜索する理由にはならんぞ」
時間稼ぎをしているのだ——ベリコフは思った。ヴィクトウルがこうして話をしているあいだに部下たちはせつせと、ヘロインを肥溜めに流しているだろう。

だがさすがにクリチェンコもベテラン刑事だった。

「お前と話すのはあとだ。捜索を始める。おい、こいつをパトカーに乗せておけ。手錠をかましてな」

ハンドスピーカをさしだした若い刑事が素早くヴィクトウルの手に手錠をはめた。ヴィクトウルは動じるようすもなくクリチェンコの目をのぞきこんだ。

「後悔するぞ、ミハイル・クリチェンコ」

「お前の友だち自慢はあとでたっぷり聞いてやる」

クリチェンコはいつて、保安部隊に指図した。

「いけっ」

保安部隊は農場になだれこんだ。

モスクワ市の中心部、ペトロフカ通りにある中央警察刑事部は、くすんだ黄色の建物だった。大きさはあるが、内部は老旧化が進み、同じ通りに連邦崩壊後建てられた新興の銀行などに比べると、いかにもみすぼらしい。かつて、この国が共産主義体制であった時代、公共機関には権力が集中していた。資金も人材も、すべては国が管理していたのだから当然といえる。

しかし資本主義が入りこんだ今、逆転が生じていた。政府公共機関の、偉容を誇った重厚な建物は、はじめとした古臭い遺物に過ぎず、銀行や証券会社、あるいは西側企業の支社などの入る建物が、近代的で洗練されたガラスの輝きを放っている。

まるで逆だな——鉄格子のはまった、すすけたガラス窓の向こうに、それらの美しいビルを眺めながらベリコフは思った。

今では西側の政府公共機関の方が、はるかに資金と人材に恵まれている。
狭い取調室にひとり立って、ベリコフは待っていた。

まるで映画のセットのような取調室だ。古いスチーム暖房のパイプと机、椅子の他には何も無い。かつてここに連れてこられた容疑者たちは、拷問とシベリアへの流刑に怯えた。今はなくなったKGBほどではないにしろ、ソビエトの司法機関はすべて巨大な権力を握っていた筈だ。

時代がかわり、KGBの残党はさっさとビジネスマンへと転職している。司法機関に残ったのは、無能か、かつての権力を忘れられない威張りたがりか、ごくまれにクリチェンコのような馬鹿正直者だけだ。

ほんの数日間、ベリコフは、現在のロシアがおかれた状況を感じとっていた。この国ではしばらく何が起きるかわからない。いいかえれば何でも起こりうる。

犯罪とビジネスを隔てる境界など存在しない。ある意味では当然だ。法を定め、それを施行してい

た国家体制がご破算になってしまったのだ。生活だけは文明国、内情は弱肉強食のジャングルだ。役人もビジネスマンも、自分を肥え太らせる者だけ手を組もうと血眼になっている。ロシアでは麻薬の販売は犯罪だが、中央アジアでは隠れた「国家事業」になっているとの情報もある。富が極端にかたよっているのだ。確かにクリチェンコがいう通り、共産主義から市場経済主義への移行にあたっての「過渡期」に、今この国はあるのかもしれない。

正直者が馬鹿を見て、抜け目ない者が富を得る。しかし、抜け目のない連中がすべて犯罪者だったらどうなる。

アメリカや他の資本主義国家にも、犯罪やそれに近い手段で金持になった人間はおおぜいいる。しかしまともな商売で金持になった人間も負けず劣らず多い。

それは完全にはいえないまでも、あるていどは公平に成功のチャンスが存在することを意味している。

しかしこの国が、クリチェンコのいう「反抗期」を終えたとき、この国の成功者がすべて犯罪やそれに近い手段で金儲けをした者はかりだったら。

おとなしい、まっとうな市民にとっては、まったく別の「暗黒の時代」が始まることになるだろう。ベリコフは息を吐き、首をふった。アメリカへと逃れた父親の判断を、今は感謝したい気分だった。もし自分がこの国で生まれていたら、クリチェンコのような正直な警官になっていたという自信はない。

うまいものを食い、西側製の高級車を乗り回せるような商売を捜していたらう。つまりは犯罪者だ。大きな音をたてて、取調室の扉が開いた。クリチェンコだった。満足そうな表情を浮かべている。「農場」の捜査で、残念ながら麻薬は見つからなかったが、クリチェンコは別の獲物を見つけたのだ。

「お客さまを紹介するぞ、ヴィクトウル」
クリチェンコは背後をふり返っていった。若い刑事につき添われたヴィクトウルが立っていた。あいかわらず無表情で、手錠をはめられたままだ。
「わざわざアメリカから、お前に会いにきた、奇特な旦那だ。ロシア語を話せるから安心していい。ウオツカの飲みっぷりだって、立派なものだ。お前の友だちが迎えにくるまではまだまだ時間がある。お相手をしてさしあげるんだ」
クリチェンコはいつて、ヴィクトウルを取調室に押しこんだ。ベリコフにだけ見えるように、指を一本立てる。

一時間のプレゼントというわけだ。
クリチェンコはズボンをゆすりあげ、若い刑事をその場に残して立ち去った。
ベリコフは窓ぎわを離れ、無言で取調室の扉を閉じた。ヴィクトウルは落ちついた表情でベリコフを見つめている。
若い刑事は壁よりかかって、腕を組んだ。きつとクリチェンコから取調べの内容をひと言洩らさず聞いてこいと指示をうけているだろう。

ベリコフは若い刑事にマルポロライトをさしだした。やめていた喫煙がこの国にきて復活した。ロシア人は自分が煙草を吸うとき、同席している人間にも勧める習慣がある。

「手錠を外してやってくれ」
ベリコフはいった。自分も煙草を一本くわえ、火をつけた。

刑事はつかのま考え、ベリコフの言葉に従った。ぞんざいな仕草でヴィクトウルの手首をつかみ手錠を外す。古い、鋼鉄製の手錠だった。ベリコフがアメリカで携行しているのは、ステンレス製の軽量タイプだ。

ヴィクトウルは平然としていた。

「すわれよ」

まだかからその瞳をのぞきこみ、ベリコフはいった。ヒゲをのばしているので年寄りに思えたが、近くからその目を見ると意外に若いことがわかった。まだ三十代の半ば、自分よりも若いかもしれない。

ヴィクトウルは、ベリコフから目をそらさず、木でできた椅子に腰をおろした。

若い刑事が煙草に火をつけた。

「俺はベリコフ。連邦麻薬取締局のエージェントだ」

ベリコフはジャケットからだした身分証を見せた。

「DEAは司法省の機関だ。俺が追いかけているのは、麻薬とその不正な取引で得られた金だ」

ヴィクトウルは無言だった。ベリコフはいったん言葉を切り、ヴィクトウルを見つめた。

「俺と話をする気はあるか」

ヴィクトウルの目におもしろがっているような表情が一瞬、浮かんだ。

「ロシア語がうまいな。名前もロシア人のようだ」

口を開いた。ベリコフは頷いた。

「俺の両親はロシア人だ。一九五〇年代に、アメリカに亡命したのさ。ベルリンの壁を乗り越えてな。親父は、東ドイツの大学に派遣されていたんだ。美術を教えるために」

ヴィクトウルはベリコフの目を見返した。

「アメリカに渡ってから美術の教師を？」

「いや」

ベリコフは首をふった。

「タクシーの運転手をして、俺たちを食わしてくれた。俺が生まれたのは、親父がアメリカにきて二年後だ」

「ベリコフ……」

ヴィクトウルはつぶやき、手を顎にあてた。ほっそりとした華奢な指だった。クリチエンコの話では、ヴィクトウルは、モスクワのエリート階級、ノーメンクラトゥーラ^{ノメンクラトゥーラ}の家庭に生まれ育ったという。

ノーメンクラトゥーラの中にも落ちぶれた人間もいるが、こうして強かに生きている人間もいるというわけだ。

「ベリコフ。上は何というんだ？」

「ダニエル」

「ダニエル・ベリコフ」

ヴィクトウルは、口の中で言葉を転がすようにつぶやき、にっと笑った。

「ダニー・ボーイ」

「ハイスクールの頃は、それを口にした奴をかたはしからぶちのめしてやった」

ベリコフがにこりともせずいうと、ヴィクトウルの口から笑みが消えた。

「ヴィクトウル、俺は、ロシアの麻薬には興味がない——」

「私は麻薬を扱わない」

ヴィクトウルがいかけたのを制し、つづけた。

「そんなことは訊いてない。俺が知りたいのは、お前の友だちのことだ」

ベリコフはパラッツォの写真をだした。

「お前にはパラッツォと名乗った筈だが、俺と同じでロシア人だ。本名はキリノフ。今日お前がいた農場に十日前にいた」

ヴィクトウルは写真に目を落とし、ベリコフを見あげた。

「知らない」

「よせよ」

ベリコフは首をふった。

「お互い忙しい身だ、ちがうか。お前さんはしばらく来てりや、大物の友だちがお前を引き取りにくると信じてるだろう。だがいいか、今日の手入れが誰のためにあつたかを考えてみる。俺のためだ」

煙草をはさんだ指で胸をさした。

「つまり、アメリカ合衆国、司法省のためだ。お前は、今のロシア政府など屁でもないと思っているだろうが、ロシアにはロシアのメンツって奴がある。アメリカ合衆国の司法省にこれこれこうだと依頼されてバクった容疑者を、取調べもろくすっぽうけさせないうちに釈放させたとしたら、ヤンキーの笑いにロシア政府はなる。よく考えろ」

はったりだった。そんな圧力を司法省がロシア政府にかけるいわれも筈もない。

だがヴィクトウルの顔に、かすかな不安が浮かぶのをベリコフは認めた。

「なぜかを教えてやる。パラッツォには、アメリカ国内で偽札を流通させたという重大な容疑がかけられている。こいつは滅茶苦茶、罪が重い。殺人よりもだ。しかもお前の農場から今日、偽ドルが見つかった。つまりお前がパラッツォに偽ドルを供給していたと、こういうことになる。アメリカ合衆

国は、ロシア政府がお前の首をさしたすまで圧力をかけつづける。お前の友だちはそのうち面倒くさくなつていっただろう。

『しかたがない。奴をさしだすか、自殺でもしてもらおう』

さすがにその威しには、すぐにはヴィクトウルは乗らなかつた。だが考えこむ表情になった。

「パラッツォがお前のもとにいないのなら、アメリカ政府はお前に興味を失くす。お前をアメリカの刑務所にぶちこむことはできないのだから」

「奴はとつくにいなくなつた」

ヴィクトウルはベリコフを見ていった。

「どこへいった？」

「イタリー」

「その嘘はなしだ。奴がイタリアに足を踏み入れられない理由をこっちはつかんでいる。お前のとこから奴は偽ドルを買っていった筈だ」

「買ってない」

ヴィクトウルは短くいった。

「ほう？」

「私は、パラッツォに、ドルを売るつもりだった。裁判では認めないが、それは事実だ」

ヴィクトウルは若い刑事の方を向いていった。

「だがパラッツォは買わなかつた。『できが悪い』、奴はそういつたんだ」

「なるほど。で、かわりに何を買った？ ヘロインか」

「ヘロインはない」

「ない？」

「ヘロインは俺の手もとになかった」

ヴィクトウルはくり返した。

ベリコフはヴィクトウルの向かいに腰をおろした。マルボロライトをさしだす。

「吸うか？」

「メンソールはないのか」

ヴィクトウルは訊ねた。

「ない」

ベリコフは首をふった。すると壁によりかかっていた若い刑事がのっそりと進みでた。革コートから煙草をとりだした。セーラムライトだった。

それを見やり、ヴィクトウルがいった。

「俺の煙草だ」

若い刑事は無言で肩をすくめた。ヴィクトウルはしかたないというように一本抜いた。ベリコフは火をつけてやった。

ヴィクトウルは黒い髪を短く切っていた。目もとにソバカスの跡があるのを、ベリコフは見てとった。瞳の中には、傲慢と狡猾さの入り交じった光がある。

メキシコやニューヨークの犯罪組織の人間を見てきたベリコフの目には、ヴィクトウルは、まだチンピラに毛が生えただていどの人間としか映らなかった。

複雑なマネーロンダリングの手段も知らず、一流の芸術家や政治家とつきあっても実業家として馬脚を現わさぬほど洗練されてもいない。

しかしロシアのこの状態があと十年もつづき、その十年を生きのびることができれば、目の前の男は立派なドンになるだろう。

この男には犯罪の世界で成功する才能がある。

ベリコフは無言でヴィクトウルの目を見つめ、新たな煙草をくわえた。

犯罪とは、つまるところ安定した社会機構の中で生じる小さな漣さざなみにすぎない。

犯罪組織がどれほど巨大化しようと、国家にとってかわることはなかった。犯罪者が表舞台に立つて、国家の運営をつかさどることなどありえない。

世界で最も洗練されたアメリカの犯罪組織はそれをよく知っている。アメリカから犯罪組織が消えてなくなることは決してない。しかしやりすぎれば、国家を敵に回すことになるし、本気になった国家を相手に生き残れる犯罪組織は存在しない。

いかえれば、犯罪組織はバランスの産物なのだ。社会の裏側で巨大化し、肥え太って、さまざまな場所でお金をばらまく。全体のバランスがとれているあいだは、国家による取締りという形をとった攻撃は、組織すべてを滅ぼすまでにはいかない。組織の触手が、政治家や大企業といったさまざまなおとこへ及んでいる以上、滅ぼすには国家にも相応の痛みを要求することになるからだ。

だから犯罪組織のトップに立つ連中は、決して自分たちがすぎないよう、気を配っている。

国家の敵として攻撃の対象となるのを、けんめいに避けようとする。国家と戦争になれば、決して勝てないのを知っているからだ。

それが結果的に、連中を洗練させ、高級レストランやカントリークラブで顔を合わせる紳士がマフィアの幹部だとは一般市民には気づかれない状況を作りあげる。

だがこの国はちがう。

この国の犯罪者には無限の可能性がある。社会機構が安定していない国には、ふつう犯罪者が金を稼げるほどの旨みのある産業は確立されていないものだが、この国はそうではない。

近代国家でありながら、社会機構が混乱しているのだ。人類の歴史の中で、敗戦を経験したわけでもないのに、このような混乱におちいった国はなかったのではないだろうか。

表舞台にあるべき産業と犯罪が直結している。この国では、アメリカで必要な偽装やとりつくりは必要ない。

人ともを動かせる組織ならば、それが犯罪者の集団であっても、代替機関が存在しない以上、産業は手を組まざるをえないのだ。

国家が敵に回る心配もない。それどころか、この国では、犯罪者が国家そのものを動かす可能性すらある。

「パラッツォはヘロインを欲しがらなかったのか」

ベリコフは訊ねた。ヴィクトウルは無言だった。

「ニューヨークの奴の組織はドラッグを売って稼いだ金がだぶついている。投資先として、お前の会社に目をつけたのじゃないのか」

ヴィクトウルは小さく頷いた。

「確かに、投資先を捜しているといっていた」

「ようし、話が合ってきた。パラッツォは、投資先を求めてロシアにやってきた。だがお前の組織じやもの足りなかった。そういうことか」

ベリコフの言葉にヴィクトウルはもう一度頷いた。

「奴の求めていたのは何だったんだ」

「ヘロインだ」

「それ見ろ、ヘロインじゃないか」

「だが少しのヘロインじゃない」

ヴィクトウルがいったので、ベリコフは顔をあげた。

「アメリカが中国人から買っているのと同じだけのヘロインが欲しいと、ミスター・パラッツォはいった」

「——何だと」

ベリコフは訊き返した。

嫌な予感がした。パラッツォに危険を囁いた小鳥は、ワシントンではなくラングレーの住人だったのかもしれない。

「そのヘロインを何に使う気なんだ」

ヴィクトウルは首をふった。

麻薬が、この地上から消えてなくなるのには、快楽とは別の理由がある。

現金にかわる、決算の手段となることだ。特に国際的な武器取引や反政府組織への援助物資として、麻薬が使われるのは常識だった。

麻薬は、現金とちがってその流れが発覚しにくく、金のように価値が下落することもない。インフレにも強いという利点がある。

そのためCIAは、アメリカ国外での非合法な取引の支払手段として麻薬を使うことがたびたびあった。

アメリカ国外で、匿名の依頼を受けたディーラーが、通常の取引外の麻薬を買いあさっているとい

う情報を得てD E Aが動く、その依頼人がC I Aだったということはたびたびある。C I Aが買った麻薬は、反米的な指導者が率いる国の反政府組織に「資金」や武器に化けて流れこむ仕組みだ。

C I Aが、そうした麻薬の買付け係として選ぶのが、マフィアの幹部だった。C I Aは見返りに偽の身分や、今回のような内偵の情報を提供する。

パラッツォは、C I Aに逃がしてもらった見返りとして、ロシアにヘロインを買付けにきたのではないか——とつさにベリコフが思ったのはそのことだった。

もしそうならば、ベリコフの追及は徒労に終わる。パラッツォを捕まえ、刑務所にぶちこもうとしても、C I Aが鼻面をつっこんでくるのは目に見えていた。

司法省の下部機関であるD E Aに対し、C I Aは独立の行政機関である。この対立は、気の遠くなるような役所どうしの貸し借りの歴史の中でうやむやにされてしまっただろう。

「なぜお前はヘロインを提供してやらなかったんだ」

それでもベリコフは訊かずにいられた。

「多すぎる。それに我々には、そのヘロインをアメリカにもちこむ方法がない。ミスター・パラッツォは、ヘロインがアメリカ国内に入ったら取引をするといった。途中で捕まったり、船が沈めば我々は大損だ」

「アメリカ国内だと。パラッツォはそういつたのか」

ベリコフは真剣な表情になった。

「そうだ」

であるなら、C I Aではない。

「パラッツォは、大量のヘロインを買付け、アメリカ国内に運びこむ人間を捜していたのだな」

ヴィクトウルは頷いた。

何が起こっているのだ。ベリコフは考えこんだ。アメリカに流れこんでいるヘロインはミャンマー、中国産の阿片を原料とした品が多い。これらのヘロインは、タイ、カンボジア、香港などからアメリカ国内にもちこまれている。

なかでも中国本土を経由し、香港からアメリカ国内にもちこまれるヘロインは、チャイナホワイトと呼ばれ、長いあいだ、アメリカ国内で最大の消費量を誇っていた。

だがD E Aとタイ軍とが、世界最大の阿片生産地を支配していたクン・サーとの戦いに勝利をおさめたのと、コカインの流行に伴い、チャイナホワイトにかつてほどの勢いは失われている。

現在アメリカ国内で非合法に消費されているヘロインは、チャイナホワイトを含む東南アジア産が約半数を占め、次いでコロンビア産が三分の一、残りがメキシコ産などだ。

コロンビア産は純度が高く、コカインの流通ルートを使って流れこんでいる。

コロンビア産のヘロインがそのまま増えていけば、チャイナホワイトの輸入を長いあいだ手がけてきた組織にとつては死活問題だ。

麻薬は供給が命だ。中毒者は、常に薬を売ってくれる売人のもとにしか足を運ばない。

今の調子でコロンビア産のヘロインがのびていけば、コカインネットワークと手を結ぶ組織が生き残り、チャイナホワイトを扱ってきた組織は消えていくことになる。

しかも香港が中国に返還されるのは目前だ。

市場経済主義への移行をめざしているとはいえ、中国はまだ社会主義体制下にある。香港をチャイナホワイトの積みだし基地にしてきた中国の犯罪組織は、打撃を免れない。それによってチャイナホワイトの供給が減ることになれば、ますますコロンビア系の組織がアメリカ国内で力を得る。

パラッツォはそれをくい止めるべく、組織の密命を帯びてモスクワへ飛んだのだ。

「奴はどこへいった?!

ベリコフは声が大きくなるのを抑えられなかった。

「わからない。バルト海じゃないか」

ヴィクトウルはつぶやいた。

クン・サーがかつて支配していた、タイ、ミャンマー、ラオスの国境地帯は、「黄金の三角地帯」と呼ばれる、世界最大のケシ生産地域だ。ケシの果汁から作られた阿片を原料に精製したのがヘロインである。

一方、アフガニスタン、パキスタンから、中央アジア五国（カザフスタン、キルギス、タジキスタン、トルクメニスタン、ウズベキスタン）にかけてのケシ生産地は「黄金の三日月地帯」と呼ばれている。

ここで作られた阿片やヘロインは、モスクワを経て、バルト三国（エストニア、ラトビア、リトニア）に流れこむ。

バルト海とはすなわち、これらの国々と西ヨーロッパをへだてる海だ。

スウェーデン、デンマーク、そしてドイツ、フランス、イギリスへと、麻薬はバルト海を渡る。

いってみれば、チャイナホワイトにおける香港の役割をバルト三国は果たしているのだ。

ヴィクトウルは、パラッツォがバルト三国へ、ヘロインの買付けに向いたのではないかといっているのだ。

だがそんな単純な真似をパラッツォがする筈はなかった。

麻薬組織は、秘密の保持には神経を尖らせている。外国人がいきなり乗りこんでいって大量のヘロ

インを買付けたいなどといえば、商売に横槍を入れられたこれまでの取引先が黙っている筈はない。

よほどの大物の紹介でもない限り、パラッツォは生きてバルト海を離れられないだろう。

またよしんば、それなりの大物を紹介者として立てていても、大量の買付けをおこなえば、価格の値あがりを引き起こすことになる。卸売価格がハネ上がれば、それは当然、末端の小売価格にも反映される。結果的に、中毒者をさらにコロンビア産のヘロインへと押しやるだけだ。

パラッツォを含め、頭のいいシチリア系の組織がそれを考えない筈はない。

もしパラッツォが本気で、ヘロインの安定供給をおこなえる人間をロシアで捜しているのならば、バルト海へなど赴く筈がなかった。

そうしたベリコフの疑念を讀みとつてか、ヴィクトウルは再び自信をとり戻していた。自分が、アメリカからきた麻薬捜査官を逆上させる情報を握っていたことに満足を感じているようすだ。

「そいつは通らない話だぞ、ヴィクトウル。パラッツォは馬鹿じゃない。殺されるのも大損をするのも、選ばない筈だ」

ベリコフがいうと、肩をすくめた。

「アメリカ人の考えていることはわからんさ」

「奴はアメリカ人じゃない。俺やお前と同じロシア人だ」

ベリコフはいった。不意にヴィクトウルの表情が変わった。目をみひらき、憎々しげに吐きだした。

「お前たちはロシア人じゃない。腐ったアメリカ人だ。お前たちの親は自分の国を裏切ったんだ」

「そういうお前こそ、自分の国をくいものにしていないじゃないか。親子二代でな」

ヴィクトウルはかっとなつた。立ちあがりかけるのを、若い刑事が肩をつかんで制した。

ベリコフはヴィクトウルの顔に自分の顔を近づけた。

「パッツオはお前に会うとき、誰かの紹介をうけてきた筈だ。誰だ」
「知らないね」

ヴィクトウルはそっぽを向いた。
「もうお前とは話したくない」

ベリコフは息を吐き、若い刑事を見あげた。

「少しのあいだ、こいつとふたりきりになりたい」

若い刑事は瞬きもしなかった。

「外で煙草を吸ってくることにします」

ヴィクトウルは怯えた表情になって刑事をふり返った。

「こいつは俺を痛めつける気だぞ」

「だからどうした」

火をつけていないセーラムライトをくわえた刑事はいった。

「お前らは年寄りを威してアパートを追いだし、それを他人に売りつける。用心棒代を払わなかった
といって、レストランに放火する。安い金で人殺しを請け負う獣を飼っている。お前がどうなろうと
知ったことか」

若い刑事はベリコフに目配せし、部屋をでていった。

扉が閉まると、ベリコフはいった。

「どうする。俺の質問に答えるか。お望み通りのシヨウを始めるか」

ヴィクトウルは虚勢を張るように笑った。

「アメリカじゃ弁護士がうるさくて、警官は何もできないのだろう。根性なしのアメリカ人に何がで

きる」

「こんなことができる」

ベリコフは指を一本立て、ヴィクトウルの髪をつかむと、引きずり起こした。壁ぎわにヴィクトウ
ルの体を押しつけ、囁いた。

「お前の膝の皿を割ってやる。血は一滴も流れないが、痛みのにたうち回る。しかもこれから先一生、
冬になればお前は俺のことを思いだす。ロシアの冬は長いそうだな」

ヴィクトウルの顔が青ざめた。ベリコフは左手でヴィクトウルの喉をつかみ、右手でヴィクトウル
の左膝の下をつかんだ。ヴィクトウルが身をよじった。

「やめろ」

「逃げたきや逃げてもいいぞ。俺を殴り倒してな。クリチェンコはお前を撃ち殺す格好の理由がで
きて喜ぶだろうさ」

「ニキーシンだ」

ヴィクトウルが早口でいった。

「奴はニキーシンの手紙をもってきた」

「その手紙はどこにある」

「決まっている、燃したよ。ニキーシンがそうしろと書いていたから」

「奴のファーストネームは」

「知らねえ。手紙には、ただ『ビッグ』としか書いてなかった」

ベリコフは手を放した。

「ビッグ・ニキーシン。ブライトンビーチの大立者。」

アメリカには現在二千名を超す、旧ソ連出身のマフィアがいる。その民族数は十七。ロシアマフィアとひと口にいつても、実は民族によってその組織は分かれている。

たとえばロシア人とチェチエン人は昔から仲が悪い。

一九九二年から九三年にかけて、モスクワではロシアマフィアとチェチエンマフィアの抗争がつづき、三十人以上が死んだ。その戦争は、アメリカにも飛び火し、ブライトンビーチのロシアレストランの店先で、カラターエフというロシアマフィアが射殺された。殺したのはチェチエンマフィアといわれている。

ニキーシンは一九九二年にアメリカに移住したロシアマフィアの大家だった。カラターエフは、アメリカに移住して引退したニキーシンともつながりがあったと噂されている。

抗争が激化しているモスクワを逃げだし、アメリカで平和な余生を送ろうと考えるロシアマフィアの大家は多い。が、そのふたりにひとりとは結局、アメリカで殺される運命なのだ。

ニキーシンは、生き残っている数少ない、引退したヴォール^ボス^スだった。

パラッツォはニキーシンを動かしたのだ。ニキーシンの紹介状をもっていれば、ロシア系の組織なら、どこもパラッツォを「客人」として迎え入れないわけにはいかないだろう。

だがなぜパラッツォは、選りにも選って、ヴィクトウルなどに話をもちかけたのだ。

ベリコフはヴィクトウルをつきとばし、椅子にすわらせた。

「奴の本当の行き先を教えてもらおう」

「知らないっていつてるだろう、本当だ」

ヴィクトウルは疲れたようにいった。

パラッツォの目的が大量のヘロインの買付けならば、中央アジアに向かった方が効果はある。

しかし広大な旧ソ連邦で、買付けたヘロインを安全に動かすのは、中央アジアのマフィアの手だけでは不可能だ。

麻薬組織とひと言でいつても、そのうちわけは、生産と流通、そして販売の三つに大別される。それぞれ専門の技術が必要で、ひとつの組織ですべてをおこなうことはありえない。コロンビアやメキシコにおいても、それは同じだ。パラッツォが中央アジアの生産組織と話をつけられたとしても、ロシア国内を移動させ、船や飛行機に積みこんで、アメリカ国内へ持ちこむためには、別の組織の協力が必要となる。

ヴィクトウルはそれを断わっている。パラッツォは、別の流通組織を捜さなければならなかった筈だ。

「奴はひとりで移動しているのか」

ベリコフは質問の矛先をかえた。

「秘書みたいな女がついている」

ベリコフは首を傾げた。クリチェンコの話には女は登場しなかった。

「どんな女だ、ロシア人か」

「ロシア語は喋るが、ロシア人じゃない。東洋人だ。朝鮮^朝民^民族^族カレイスキーかもしれん」

「名前は何という」

「知らない」

「愛人じゃないのか」

「そうかもしれないが、俺にはそう見えなかった。パラッツォはその女に気を遣った。自分の女なら、そんなことはしないだろう。農場へ招待したときも、女はモスクワで待っていた」

「だから愛人じゃないという理由にはならない」
ヴィクトウルは肩をすくめた。

「とにかく、愛人には見えなかった」

ベリコフはヴィクトウルの向かいに腰をおろした。その女が突破口になるかもしれない。

「女の年齢は」

「二十代か三十代。東洋人の年はよくわからない」

「ロシア語は流暢だったのか」

「ああ。だけど、あんたやパラッツォとはちがった。わかるだろう……」

ロシア生まれのカレイスキーならば、流暢なロシア語を喋った筈だ。そうではないとヴィクトウルは知っているのだった。

「女はずっとパラッツォといっしょだったのか、アメリカから」

「わからない」

ヴィクトウルは首をふった。

「女の外見について話せ」

「美人だ。だがスラブ系の血は混じっちゃいない。背が高く、あまり喋らない。パラッツォはいつもその女の機嫌をとっていた」

「機嫌をとっていた？ 買物をしてやったりとかそういうことか」

「そうじゃない。やたらに電話をしちゃ、これからどこへいくとか、誰と会う、という報告を入れていた」

ベリコフは考えこんだ。パラッツォが婿入りしたシチリア人の家庭は、徹底した男権主義だ。男は

仕事の話をする必要を一切、認めない。

またニューヨークの、パラッツォが属するファミリーの周辺には、重要人物と思われる東洋系の女は存在しない。

その女がパラッツォの愛人ではなくビジネス上の関係者だとすれば、ふたりはロシアで合流したのだ。

黙りこんでいるベリコフにヴィクトウルがいった。

「奴を捜す手伝いをしてやろうか。あんたがクリチェンコに話をつけてくれるなら」

「そいつは無理だな。俺もクリチェンコも一切、取引に応じない」

ベリコフは冷ややかにいった。ヴィクトウルは薄笑いを浮かべた。

「じゃあロシア中を捜すんだな。パラッツォとあの女はシベリアにいるかもしれないぜ」

ベリコフはヴィクトウルをにらんだ。

「何か知ってるな」

「ちょっと思いたしたことがある」

「何だ」

「だからクリチェンコと話を——」

ベリコフは右手でヴィクトウルの喉をつかんだ。ヴィクトウルの顔を引き寄せ、いった。

「いいか、小僧。アメリカ人を甘く見るなよ。本当に貴様の両膝を叩き潰してやってもいいんだぞ」

喉をつかんだ手を、ヴィクトウルの顔が紫色になるまでゆるめなかった。ヴィクトウルはけんめいになってベリコフの手をふりほどこうとしたが無駄だった。

ようやくベリコフが手を放すと、ヴィクトウルは咳こみ、喉を鳴らして息を吸いこんだ。

「いうんだ」

「た、たいしたことじゃねえよ」

「いえ！」

ヴィクトウルは涙目になってベリコフを見た。

「奴は悩んだ。目的地に行くのに——そこがどこだかわなかったけど——いったんロシア国外にでた方が早いのか、そのままモスクワから飛行機に乗った方が早いかってな。女とそう電話で話しているのを聞いたんだ……」

そのとき取調室のドアが開いた。若い刑事を従えたクリチェンコが立っていた。ヴィクトウルには目もくれずにいった。

「時間だ」

ベリコフはクリチェンコを見つめたが、何もいわずに頷いた。

ロシア国内にあつて、しかしいったん国外にでた方が早く辿りつけるかもしれない場所。そこがパラッツォが向かったところなのだ。

中央アジアではない。中央アジアなら、モスクワから国内線に乗ればすむ。同じ理由でバルト海でもない。

「何か歌ったか」

クリチェンコは立ちあがったベリコフに訊ねた。

「地図を見せてくれ」

それがベリコフの答だった。